中国語を母語とする日本語学習者の受身文の使用実態
学習者コーパスの分析結果から

何 月琦

要旨

本研究は、3つの学習者コーパスから収集した15タスクの作文902篇を用いて、中級から上級レベルの中国語を母語とする日本語学習者による受身文の使用実態を検討した。その結果、有情主語受身の「直接受影型」と非情主語受身の「事態実現型」「習慣的社会活動型」「状態型」という4つの受身構文タイプの使用は日本語の習熟度とともに変化する傾向が見られた。学習者による誤用例と非用例を分析した結果から、日本語教育では有情主語受身文の「視点の一貫性機能」と非情主語受身文の「動作主背景化機能」を重点的に教えることが受身文の習得を促進させると言える。

キーワード
受身文、習得、中国語母語話者、学習者コーパス、誤用、非用

Abstract

This study analyzes the usage of Japanese passive voice among native Chinese speakers (learners) with an intermediate or advanced level of proficiency in Japanese as a second language. To that end, 902 written compositions from three learners' corpuses were examined. The analysis revealed that the usage of the four passive voice types vary with the learners' Japanese proficiency levels. This study also found that in Japanese language education, a focus on teaching "empathy" in animate-subject passive and "agent de-focusing" in inanimate-subject passive is particularly effective to improve learners' usage of passives. The findings of this study provide insights into and suggestions to improve Japanese language education for native Chinese speakers.

Key words
passive voice, acquisition, native Chinese speaker, learner corpus, misuse, non-use

The Usage of Japanese Passive Voice among Native Chinese Speakers Learning Japanese
An Analysis of Learners' Corpuses

He Yueqi

1 はじめに

受身文は日本語教育において初級の後半から導入されるが、日本語学習者にとって習得が難しい文法項目の1つであるとされている（前田2011, 庵・張2017等）。従来の研究においても、文法研究、対照研究等、様々な側面から膨大な数の研究が行われてきたものの、第二言語習得においては、中国語を母語とする日本語学習者（以下：学習者）による受身文の使用実態、誤用と非用の要因について十分に検討されているとは言い難い。

本研究は3つの学習者コーパスを用いて、中級から上級レベルの学習者による受身文の使用実態を検討する。具体的には、受身の使用と学習者の日本語能力との関連性を調査した上で、学習者による受身文の使用の特徴を記述する。

2 先行研究

中国語母語話者を対象にした日本語の受身文の習得研究には、張（2015）、李（2018）等がある。張（2015）は受身文を対立する能動文の有無によって分類し、文法性判断テスト、文産出テストとストーリー構築テストに関するアンケート調査を用いて、初級から上級レベルの学習者の受身文の構文と機能の習得過程について考察した。その結果、学習者が「直接受動：ひと」から始まり、「間接受動：持ち主」と「直接受動：もの」を経て、「間接受動：不利益」へと進むことを明らかにした。受身文の機能の習得過程について、張（2015）は学習者が「動作主の脱焦点化」の機能に結びつけて習得し始め、「受影性の表示」を経て、最後に「視点の統一」の順序で習得していくと述べている。この「視点の統一」の機能について、李（2018）は「受身表現が文中に出現する位置」（前田2011: 68）によって分類し、質問紙による文法テストを用いて、中級から上級レベルの学習者の受身文の習得について検討した。その結果、学習者が文脈依存性の高い日本語の受身文を使いこなせない根本的な原因の1つは、日本語の視点の捉え方、視点の統一が習得されていないことだと指摘している。しかし、質問紙調査法を用いた習得研究は、質問項目以外の事柄を知り得ないため、学習者の運用における受身文の使用実態が反映されているとは言えない。

質問紙調査法を用いた先行研究のほかに、対照研究に基づいた母語干渉の可能性を検討した誤用分析（張2001等）と学習者コーパスを用いた誤用分析（望月2009等）が多いが、いずれも学習者の受身文の使用実態については詳しく言及していない。質問紙調査法と誤用分析では明らかになっていない使用実態があると考えられる。学習者が産出したまとまった量の受身文を調査するためには、学習者コーパスがより有効だと考えられる。したがって、本研究は3つの学習者コーパスから収集した15タスクの作文902篇を用いて、中級から上級レベルの日本語学習者による受身文の使用実態を検討する。

3 研究方法

3.1 受身の分類

日本語の受身文の分類には大きく2つの観点がある。1つ目は受身文を対立する能動文の有無によって「直接受身vs.間接受身」に分けるものである。これに対し、「有情物が主語に立ち、行為者をニ格補語とし、話し手が行為者よりも被動者（受影者）に共感を寄せ、被動者の立場から事態を叙述する」（志波2005: 198）ための有情主語受身文と「非情物が主語に立ち、動作主が背景化され、本来他動詞的な事態であるものを自動詞的な捉え方に持ち込む」（志波2005: 200）ための非情主語受身文という観点からの分類もある（益岡1982, 志波2005等）。本研究では、対応する能動文の有無よりも受身文そのものの意味・機能、及び構造的な特徴の違いを重視する観点から、益岡（1982）、志波（2005）に従い、受身文の「主語（対象）が影響を受ける」という意味があるか否かに着目し、学習者コーパスで観察された受身文を6つの受身構文タイプに分類した（図1）。

- 受身文
  - 有情主語（受影）
    - 直接受影型（ケンが警官に注意された。）
    - 使役受身型（鈴木先輩が上司にお酒を飲まされた。）
    - 所有物受影型（ケンが犬にサンドイッチを食べられた。）
  - 非情主語（自動詞的）
    - 事態実現型（駅前にビルが建てられた。）
    - 習慣的社会活動型（この建物は豊田講堂と呼ばれている。）
    - 状態型（壁にポスターが貼られている。）

図1 本研究における受身文の分類

3.2 分析データ

本研究は作文タスクのバリエーションが豊富であり、学習者の詳細な背景情報が公開され、日本語能力の客観的なテストが行われた学習者コーパスを調査対象とし、受身表現が現れやすいタスクを分析データとした。

①「多言語母語の日本語学習者の横断コーパス：I-JAS」（国立国語研究所）は日本語母語話者と12言語の異なる母語を持つ日本語学習者を対象にし、7種類12タスクによる話し言葉・書き言葉を電子化した言語資料である。

②「YNU書き言葉コーパス」（金澤裕之（編）（2014）『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』ひつじ書房;横浜国立大学）（以下：YNU）は日本語母語話者30名、中国語母語話者30名、韓国語母語話者30名を対象にした、12タスクによる書き言葉の言語資料である。

③「台灣日語學習者語料庫」（台湾人日本語学習者コーパス;台湾成功大学）（以下：CTLJ）は台湾の高等教育機関で日本語を学ぶ学習者を対象にしたもので、22タスクによる書き言葉を電子化し、タグを付けた言語資料である。

表1　作文タスクの一覧

タスク	上位群 作文数（篇）	下位群 作文数（篇）
1. ピクニック（I-JAS）	96	99
2. 鍵（I-JAS）	96	99
3. 私たちの食生活：ファーストフードと家庭料理（I-JAS）	63	51
4. 学長に奨学金増額の必要性を訴える（YNU）	26	4
5. 市民病院の閉鎖について投書する（YNU）	26	4
6. 広報紙で国の料理を紹介する（YNU）	26	4
7. 先輩に起こった出来事を友人に教える（YNU）	26	4
8. 小学生新聞で七夕の物語を紹介する（YNU）	26	4
9. 私のお気に入りの店（CTLJ）	4	19
10. 私の好きな映画（CTLJ）	4	19
11. 私の宝物（CTLJ）	4	20
12. 私の実家（CTLJ）	4	19
13. 高校時代の私（CTLJ）	3	18
14. ○○は○○すべきだ（CTLJ）	19	34
15. 社会問題（CTLJ）	28	53
計	451	451

本研究はJ-CAT日本語テスト得点250点以上（日本語能力試験旧1級相当）、あるいは日本語能力試験N1／旧1級に合格した学習者を上級レベルの学習者（以下：上位群）とし、J-CAT日本語テスト得点200～250点（日本語能力試験旧2級相当）、あるいは日本語能力試験N2／旧2級に合格した学習者を中級レベルの学習者（以下：下位群）とした。作文データの内訳を表2に示す。

表2　作文データの内訳

日本語能力別	テスト・スコア別	学習者数（名）	作文数（篇）
上位群	日本語能力試験旧1級／N1	72	196
	J-CAT日本語テスト250点以上	96	255
下位群	日本語能力試験旧2級／N2	97	202
	J-CAT日本語テスト200～250点	99	249
	計	364	902

3.3 受身の抽出

本研究では、以下の手順で調査対象を抽出した。手順①：学習者コーパスから収集した作文902点を一文ずつ確認し、手作業で受身文の正用、誤用、非用を抽出した。手順②：学習者が産出した文に関しては、日本語母語話者3名による容認度判定を行った。判定が揺れた場合、3名のうち2名が同様に下した判定を採用した。誤用例と非用例の訂正案は日本語母語話者によるものである。

4 分析結果

本研究の作文データより抽出した分析対象は847例あった。3名の日本語母語話者による許容度判定の結果、正用は412例、誤用は294例（誤用率34.7%）、非用は141例（非用率16.6%）であった。上位群と下位群の受身文の使用頻度を表3に示す。上位群と下位群の学習者と受身文の使用について、2×3のカイ二乗分布を使った独立性の検定を行った。その結果、受身の使用は学習者の日本語能力によって、有意に異なることが示された［$\chi^2(2)=41.433, p<.001$, Cramer's V = .221］。そこで残差分析を行ったところ、表3の調整された残差の通り、上位群では正用が有意に多く、誤用と非用が有意に少ないのに対し、下位群では逆に正用が有意に少なく、

誤用と非用が有意に多い結果となった。受身文の使用傾向は習熟度とともに変化すると考えられるが、依然として、学習者にとって難しいことも窺える。

表3　上位群と下位群の受身文の使用頻度と調整済み残差

学習者	正用		誤用		非用	
	頻度（割合）	調整済み残差	頻度（割合）	調整済み残差	頻度（割合）	調整済み残差
上位群	277（57.7%）	6.037***	148（30.8%）	−2.711**	55（11.5%）	−4.636***
下位群	135（36.8%）	−6.037***	146（39.8%）	2.711**	86（23.4%）	4.636***

$^{*}p < .05, ^{**}p < .01, ^{***}p < .001.$

5 考察

本節では、各受身構文タイプの使用と学習者の日本語能力との関連性を調査した上で、学習者の作文で観察された受身文を各受身構文タイプの意味・機能に着目しながら詳しく記述し、誤用と非用の要因を分析する。本節に挙げた例文は複数の学習者に共通するものである。誤用例と非用例のカッコ内に日本語母語話者による訂正案を示す。

5.1 直接受影型

直接受影型とは、主語に立つ被動者（受影者）が動作の直接対象として影響の与え手である行為者から働きかけを受けることを表す（志波2015: 54）受身構文である（例（1））。直接受影型を始めとした有情主語受身文は話し手が行為者よりも被動者（対象）に共感を寄せ、被動者の視点から事態を述べるため（志波2015: 53）、視点の交替という機能を持つ。

（1）ケンはうちの鍵を持っていませんでした。（中略）仕方がないので、梯子を使って、二階の窓から家に入ろうとしましたが、ちょうど警察官に見られて、泥棒だと思われました。　（下位群・I-JAS：CCM32）

上位群と下位群の直接受影型の使用頻度を表4に示す。直接受影型の使用について、2×3のカイ二乗分布を使った独立性の検定を行った。その結果、学習者の日本語能力によって有意に異なることが示された［χ^2 (2) = 12.445, p = .002, Cramer's V = .203］。そこで、残差分析を行ったところ、表4の調整された残差の通り、上位群では正用が有意に多く、誤用が有意に少ないのに対し、下位群では逆に正用が有意に少なく、誤用が有意に多い結果となった。

表4　直接受影型の使用頻度と調整済み残差

直接受影型	正用		誤用		非用	
	頻度（割合）	調整済み残差	頻度（割合）	調整済み残差	頻度（割合）	調整済み残差
上位群	109（67.7%）	3.492***	38（23.6%）	−3.097**	14（8.7%）	−0.939
下位群	68（47.9%）	−3.492***	57（40.1%）	3.097**	17（12.0%）	0.939

$^{*}p < .05, ^{**}p < .01, ^{***}p < .001.$

直接受影型では、「自他動詞に関する誤用」（誤用例（2）（3））と「視点の一貫性に関する非用」（非用例（(4)（5））が目立つ。

（2）*ケンははしごで二階に上がって家に入ろうと思いました。そのとき、警官に止まられました。（→止められました）　（下位群・I-JAS：CCH20）

（3）*ちょうど傍に梯子があった。それを使って、二階の窓から入ろうとしたケンは警官に止まれた。（→止められました）　（上位群・I-JAS：CCM20）

（4）*ケンは梯子を持って2階を登っています。その様子を警察に見ました。（→見られました）　（下位群・I-JAS：JJE16）

（5）*ケンが部屋の傍にある梯子をもって、登って、その二階の開いている窓に入るつもりでした、（中略）その時に通った警官に気づいてしまいました。そして、ケンが悪い人と思ってしまいました。（→気づかれてしまいました、だと思われてしまいました）　（上位群・I-JAS：CCH45）

誤用例（2）（3）の問題点は有対自他動詞（活用語尾[-aru][-eru]）の混同である。非用例（4）（5）は学習者が作文を書く際に視点が統一されていないことによるものだと考えられる。非用例（4）は「ケン」の立場から出来事が描かれている。これにより「ケン」は先行文「登っている」の主語になっており、後続文は「警官に見られた」という形にして、視点を「ケン」に寄せたままにする必要がある。

非用例（5）も視点は「警官」より「ケン」にあり、したがって、主語の統一のために、述語動詞「気づく」「思う」を受身形にする必要がある。有情主語受身文と中国語の受身文（被構文）は共に「受影」（益岡1982）の意味を帯びているため、対応する場合が多い。しかし、中国語の受身文（被構文）は「共感度階層（一人称＞二・三人称）」（久野1978）を問題にしない（張2001, 古賀2018等）。日本語教育では有情主語受身文の視点の一貫性という機能に関して前後文を提示しながら重点的に指導する必要があるだろう。そして、日本語では可能動詞を含め、活用語尾[-eru]の動詞が自動詞である場合が多いため、自他動詞を指導する際には活用語尾[-eru]の動詞には他動詞もあることに注意を促すべきであろう。

5.2 使役受身型

使役受身型とは、主語に立つ有情者が使役の対象となって、使役主の指定した動作を強制的に実行させられることを表す受身構文（志波2015: 71）である（例（6））。

（6） この間、鈴木先輩が新入社員歓迎会で上司に飲まされて、その後カラオケに行ったみたい。 （上位群・YNU：C047）

上位群と下位群の使役受身型の使用頻度を表5に示す。使役受身型の使用について、フィッシャーの正確確率検定（両側検定）を行ったところ、$p = .231$となり、使役受身型の使用と学習者の日本語能力との関連は見られなかった。

表5 使役受身型の使用頻度とその割合

使役受身型	正用		誤用		非用	
	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
上位群	13	44.8%	5	17.2%	11	38.0%
下位群	2	20.0%	1	10.0%	7	70.0%

使役受身型では、「格体制に関する誤用」（誤用例（7））と「使役受身に関する非用」（非用例（8）（9））が目立つ。

（7）*二次会の時にも、先輩に歌を歌わされて、しかも何曲も、鈴木先輩が歌っているところで倒れたんだの。（→が） （上位群・YNU：C054）

（8）*新入社員歓迎会だから、新人の鈴木先輩がいっぱい飲まれた。（→飲まされた） （上位群・YNU：C054）

（9）*この間、新入社員歓迎会で鈴木先輩が上司達にお酒をいっぱい飲まさせた。（→飲まされた） （下位群・YNU：C036）

誤用例（7）の問題点は使役受身の主語（対象）が「ニ格」で表されたことである。非用例（8）（9）に共通する問題点は学習者が使役受身を習得していないことによるものだと考えられる。日本語では、使役対象が使役主の指定した動作を強制的に実行させられることを表す場合、使役受身文が用いられるが、中国語では強制の意味がある受身文あるいは使役文が用いられる。中国語の受身マーカー「被／叫／让／给」と使役マーカー「让／叫／使／请／给」は共に前置詞の役割を果たしており、1つの述語に同時に使用することはできない。したがって、日本語教育で使役受身型を指導する際には使役受身の形態論的な形や構造、構文論的特徴について、十分に説明し、練習させる必要があるだろう。

5.3 所有物受影型

所有物受影型とは、「動作主が主語に立つ有情者の所有物に働きかけ、変化させることで、主語の有情者が影響を被ることを表す」（志波2015: 130）受身構文である。作文データで見られた所有物受影型はタスク1「ピクニック（I-JAS）」という絵描写のストーリーライティングに集中しているため、ここでは本研究における所有物受影型の分類について詳しく説明したい。

所有物受影型の対象（所有物）は「を」でマークされるのが普通である（例（10））。このタイプの受身文は多くの先行研究において「持ち主の受身文」に分類されている。タスク1「ピクニック（I-JAS）」の文頭に「朝、ケンとマリはサンドイッチを作りました」という文が示されているため、旧情報であるサンドイッチ（食べ物）が「は」で取り立てられている例文が見られた（例（11））。さらに、作文データでは非情物（サンドイッチ）が主語に立つが、潜在的受影者である「ケンとマリ」に共感を寄せて叙述する例文もある（例（12））。例（12）のような受身文は「潜在的受影者のいる受身文」（益岡1991）と呼ばれている。そのタイプの受身文は主語が潜在的受影者の所有物や活動・存在場所であることが普通で、「持ち主

の受身文」とも関連している（志波2005: 202）。「潜在的受影者のいる受身文」では行為者が想定されやすいため、行為者の存在を背景化して、行為の実現（結果）を中心に捉える典型的な非情主語受身文と異なる（志波2005: 202）。したがって、本研究は以下の例（10）（11）（12）のような文を所有物受影型に分類した。

（10）朝、ケンとマリはサンドイッチを作りました。（中略）バスケットを開けて、ものを食べられたことに気づきました。　（下位群・I-JAS：CCH42）
（11）朝、ケンとマリはサンドイッチを作りました。（中略）準備した食べ物はもう食べられたことに気づきました。　（下位群・I-JAS：CCM47）
（12）朝、ケンとマリはサンドイッチを作りました。（中略）サンドイッチが犬に食べられたことに二人は気づきました。　（上位群・I-JAS：CCT16）

上位群と下位群の所有物受影型の使用頻度を表6に示す。所有物受影型の使用について、フィッシャーの正確確率検定（両側検定）を行ったところ、$p = .214$となり、所有物受影型の使用と学習者の日本語能力との関連は見られなかった。

表6　所有物受影型の使用頻度とその割合

所有物受影型	正用		誤用		非用	
	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
上位群	9	12.7%	50	70.4%	12	16.9%
下位群	4	5.9%	46	67.6%	18	26.5%

所有物受影型では、「述語動詞の形式、アスペクトに関する誤用」（誤用例（13））と「視点の一貫性に関する非用」（非用例（14）（15））が目立つ。

（13）*バスケットの中を見ると、用意していた食べ物はもう食べされしまいました。（→食べられてしまっていました）　（上位群・I-JAS：CCS49）
（14）*バスケットの中を見ると食べ物は全部食べてしまいました。（→食べられてしまっていた）　（下位群・I-JAS：CCS03）
（15）*バスケットを開けた時、もう全部の物が食べた。（→食べられていた）　（上位群・I-JAS：CCH55）

誤用例（13）と非用例（14）（15）に共通する問題点は「過去パーフェクト」（工藤1995）のアスペクト「テイタ」に関する誤用である。その「テイタ」の意味は「バスケットを開けた」という設定時点において、それより前に実現した運動「食べ物は犬に食べられていた」が引き続き関わり、効力を持っていることを表す（工藤1995: 99）。非用例（14）（15）は主人公であるケンとマリの立場から、「サンドイッチとリンゴを犬に食べられていた」ことを叙述するため、視点は動物（犬）より人間（ケンとマリ）にあるので、したがって、主語の統一のため、述語動詞「食べる」を受身にする必要がある。以上のことから、受身とアスペクトが複合的に絡んだ出来事は学習者にとって非常に難しいことが窺えた。そして、学習者が作文を書く際には、同一人物の側から述べ続けるよりも、視点を動作主体に置きやすい傾向が見られた。日本語教育で「所有物受影型」を指導する際には「視点の一貫性機能」を重点的に指導する必要がある。

5.4 事態実現型

事態実現型とは、非情物である直接対象が主語に立ち、動作主が個別の有情者で、個別具体的なアスペクトで述べられる受身構文（志波2015: 46）である（例（16））。事態実現型を始めとした非情主語受身文は「通常なら外的な行為者がいなければ起こり得ない事態を、その外的行為者の存在を含意しつつ不問に付し、行為の実現（結果）を中心に捉え、自然発生的自動詞相当として述べる」（志波2005: 200）ため、動作主背景化という機能を持つ。

（16）先日開かれた留学生会会議では、留学生に向けた奨学金を増やすという意見が出されました。　（上位群・YNU：C038）

上位群と下位群の事態実現型の使用頻度を表7に示す。事態実現型の使用について、2×3のカイ二乗分布を使った独立性の検定を行った。その結果、学習者の日本語能力によって有意に異なることが示された［$\chi^2(2) = 13.788, p = .001$, Cramer's V = .274］。そこで、残差分析を行ったところ、表7の調整された残差の通り、上位群では正用が有意に多く、非用が有意に少ないのに対し、下位群では逆に正用が有意に少なく、非用が有意に多い結果となった。

表7　事態実現型の使用頻度と調整済み残差

事態実現型	正用		誤用		非用	
	頻度（割合）	調整済み残差	頻度（割合）	調整済み残差	頻度（割合）	調整済み残差
上位群	71（60.7%）	3.636***	29（24.8%）	−1.796	17（14.5%）	−2.495*
下位群	22（32.8%）	−3.636***	25（37.3%）	1.796	20（29.9%）	2.495*

$^{*}p < .05, ^{**}p < .01, ^{***}p < .001.$

事態実現型では、「格体制に関する誤用」（誤用例（17）（18））と「動作主背景化機能に関する非用」（非用例（19）（20））が目立つ。

（17）*この市民病院は現在経営困難のため、閉院を検討されています。（→が）
（上位群・YNU：C002）

（18）*先日の留学生会の会議で、留学生の奨学金を増やすべきだという意見が多数の会員に提出されました。（→によって出されました）
（上位群・YNU：C054）

（19）*家庭料理は栄養、美味しさ、見た目もよく考えて作った料理である。（→作られた）
（上位群・I-JAS：CCM01）

（20）*第三のデメリットは、中国では、現在、食品添加物や食材の出処など食品の安全性と品質に大きな問題が引き起こしていることだ。（→引き起こされている）
（上位群・I-JAS：CCM33）

誤用例（17）の問題点は主語（対象）が「ヲ格」で表されたことである。誤用例（18）の問題点は行為者が「ニ格」で表されたことと述語動詞の選択ミスである。非用例（19）（20）は学習者が非情主語受身文の動作主背景化機能を理解していないことによるものだと考えられる。現代中国語において、標識のある受身文（「被構文」）は主に被害の意味を表す。これに対し、非情物の対象が動詞に前置されるだけの標識のない受身文（「意味上の受身文」）は、［非情物（対象）＋（時間）（場所）＋動詞］という構造を持ち、中立的な意味を伝達するときに適している（例：「入学典礼将于4月5日在丰田讲堂举行」（直訳：入学式は4月5日に豊田講堂で行う））。そのため、事態実現型を中国語に訳す場合は、通常「意味上の受身文」が用いられる（梅2016等）。日本語教育で事態実現型を指導する際には学習者が中国語の「意味上の受身文」の影響を受けやすいことに注意を促すべきであろう。

5.5 習慣的社会活動型

習慣的社会活動型とは、非情物である直接対象が主語に立ち、動作主が不特定多数の一般の人々で、反復・習慣のテンス・アスペクトで述べられる（志波2015: 46）受身構文である（例（21））。

（21）7月7日は七夕と呼ばれています。
（上位群・YNU：C043）

上位群と下位群の習慣的社会活動型の使用頻度を表8に示す。習慣的社会活動型の使用について、フィッシャーの正確確率検定（両側検定）を行ったところ、$p = .005$, Cramer's V = .322となり、学習者の日本語能力によって有意に異なることが示された。したがって、習慣的社会活動型の使用傾向は習熟度とともに変化すると考えられる。

表8　習慣的社会活動型の使用頻度とその割合

習慣的社会活動型	正用		誤用		非用	
	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
上位群	50	80.6%	10	16.1%	2	3.2%
下位群	23	56.1%	9	22.0%	9	22.0%

習慣的社会活動型では、「アスペクトに関する誤用」（誤用例（22））と「動作主背景化機能に関する非用」（非用例（23）（24））が目立つ。

（22）*この7月7日はのちほど中国のバレインタインデーになったと言われる。（→言われている）
（上位群・YNU：C058）

（23）*国民からの税金だから、無駄に使うことは常に見られるものだ。（→使われる）
（下位群・CTLJ：405）

（24）*ファーストフードは短時間で調理することができ、注文してからすぐ食べられる食事です。しかし、ファーストフードはカロリー、脂肪と塩分が高い食品だから、肥満のリスクが高く、さまざまな病気を引き起こす

から控えめにすべきだとしている。（→とされている）（下位群・I-JAS：CCT02）

誤用例（22）は反復・習慣のアスペクト「テイル」に関する誤用である。非用例（23）（24）は学習者が非情主語受身文の動作主背景化機能を理解していないことによるものだと考えられる。中国語の「被構文」は受影性や物理的な影響と関係なく、主語に立つ非情物の属性について述べる場合もある（李2017: 110）。このタイプの「被構文」は［非情物（対象）＋被（受身マーカー）＋動詞－結果補語］という構造を持ち、習慣的社会活動型に対応する場合が多い（例：「四川被称为天府之国」（訳：四川は天府の国と呼ばれている））。日本語教育で習慣的社会活動型を指導する際には動作主背景化機能と「反復相」（工藤1995）を重点的に教える必要がある。

5.6 状態型

状態型とは、動作主を想定できず、典型的には結果状態のアスペクトで述べられる受身構文である（志波2005）（例（25））。本研究は超時の事態を表す受身構文も状態型として分類した（例（26））。

（25）この病院には近くの地区に設けられていない婦人科と回復センターがあります。（上位群・YNU：C002）

（26）餃子には中国の数百年の歴史が濃縮されているといっても過言ではない。（上位群・YNU：C047）

上位群と下位群の状態型の使用頻度を表9に示す。状態型の使用について、フィッシャーの正確確率検定（両側検定）を行ったところ、$p = .001$, Cramer's V = .408となり、学習者の日本語能力によって有意に異なることが示された。したがって、状態型の使用傾向は習熟度とともに変化すると考えられる。

表9 状態型の使用頻度とその割合

状態型	正用		誤用		非用	
	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
上位群	25	62.5%	11	27.5%	4	10.0%
下位群	16	41.0%	5	12.8%	18	46.2%

状態型では、「格体制に関する誤用」（誤用例（27））と「動作主背景化機能に関する非用」（非用例（28）（29））が目立つ。

（27）*友達の辞書は私のより軽いけど、それほど多く言葉を収録されていません。（→が）（下位群・CTLJ：37）

（28）*テーブルの上にはいろいろな人のサインが書きました。（→書かれています）（下位群・CTLJ：23）

（29）*台湾の山の斜面にいっぱい栽培しているビンロウは、もう環境に多大な影響を与えてしまった。（→栽培されている）（下位群・CTLJ：120）

誤用例（27）の問題点は主語（対象）が「ヲ格」で表されたことである。非用例（28）（29）は学習者が非情主語受身文の動作主背景化機能を理解していないことによるものだと考えられる。日本語では、「何らかの外的行為者の働きかけの残存として、ある場所にあるモノがあるあり方で存在していることを表す」（志波2015: 246）とき、存在様態を表す受身文が用いられる。そのタイプの受身文は中国語では、受身マーカーを用いない「存在文」（［場所＋動詞－着＋非情物（対象）］（例：「墙上贴着海报」（直訳：壁にポスターを貼っている））に対応する場合が多い。日本語教育で存在文的構造を取る状態型受身文を指導する際には学習者が中国語の存在文からの影響を受けやすいことに注意を促すべきであろう。

6 おわりに

本研究は、3つの学習者コーパスに収録されている作文902篇を用いて、中級から上級レベルの中国語を母語とする日本語学習者による受身文の使用実態を検討した。その結果、「直接受影型」「事態実現型」「習慣的社会活動型」「状態型」の使用は習熟度とともに変化する傾向が見られた。学習者による誤用例と非用例を分析した結果から、日本語教育では有情主語受身文の「視点の一貫性機能」と非情主語受身文の「動作主背景化機能」を重点的に教えることが受身文の習得を促進させると言える。今後さらに、学習者による発話データや学習者縦断コーパスを用いて、学習者の受身文の使用上の特徴と習得過程につい

て検討したい。そして、日本語母語話者や異なる母語を持つ日本語学習者の受身文の使用と比較することによって、学習者による受身文の使用上の問題点を明らかにしたい。

〈名古屋大学大学院生〉

謝辞
本稿は「第12回 日本語／日本語教育研究会」においてポスター発表した内容を加筆修正したものです。本研究を遂行するにあたり、多くのご指導とご助言をくださった名古屋大学の志波彩子先生、大変有益なご意見をくださった査読者の方々に心より感謝を申し上げます。また、受身文の容認度判定にご協力をいただいた日本語母語話者の皆様にも厚くお礼を申し上げます。

参考文献

庵功雄・張志剛（2017）「正確で自然な立場の選び方」『わかりやすく書ける作文シラバス』pp.3–17.　くろしお出版
工藤真由美（1995）『スペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
久野暲（1987）『談話の文法』大修館書店
古賀悠太郎（2018）『現代日本語の視点の研究―体系化と精緻化』ひつじ書房
志波彩子（2005）「2つの受身―被動者主役化と脱他動化」『日本語文法』5(2), pp.196–212.
志波彩子（2015）『現代日本語の受身構文タイプとテクストジャンル』和泉書院
張蘇（2015）「中国人学習者の日本語受動文の習得研究」東北大学博士学位論文
張麟声（2001）『日本語教育のための誤用分析―中国語話者の母語干渉20例』スリーエーネットワーク
梅佳（2016）「日本語における直接受身文の研究―中国語との対応関係を中心に」九州大学博士学位論文
前田直子（2011）「受動表現の指導と「拡大文型」の試み」『日本語／日本語教育研究』2, pp.67–84.
益岡隆志（1982）「日本語受動文の意味分析」『言語研究』82, pp.48–64.
益岡隆志（1991）「受動表現と主観性」仁田義雄（編）『日本語のヴォイスと他動性』pp.105–12.　くろしお出版
望月圭子（2009）「中国語を母語とする上級日本語学習者によるヴォイスの誤用分析―中国語との対照から」『東京外国語大学論集』78, pp.85–106.
李偉（2018）「第二言語としての日本語の受身文の習得研究―視点に着目して」大阪大学博士学位論文
李藝（2017）「現代日本語のヴォイスに関する研究―中国語との対照を交えて」神戸市外国語大学博士学位論文